

刊 夕 新 城 新 聞

日 三 十 月 五 日 發 行 日 報 日 報 日 報

樺太の臭氣

赤井 嶽 男

これはアイヌ語の挨拶で、生活が今尚ほ原始民族の單純さを保ち凡そ数少い言葉の裡に生きてゐる彼等の間に於て、これが朝な夕な早よ夜なら「今晩は」になる重寶な言葉である。

新妻久満男選

好問 伊藤 阿沙男

〇戸を繰るや谷ふかふかとよめてはのほの匂ふ山櫻花

〇温泉にひたりこの朝明けの静けさを櫻花見てうれひ忘れし

〇櫻咲く庭下をゆきゆきて春あけはの温泉にひたり

〇馬酔木咲く山路の裏下はろけもたぎつ瀬しらく岩を噛む見ゆ

〇はつ／＼の雨の來る花馬酔木山路にいとま真白かりける

小詩 第一首は一寸讀りかたかといふところだが、これは「戸を繰るや」は「戸を繰るや」は「戸を繰るや」

最近樺太へ行つた亡妻のお袋から原産地たる亞麻澗で獲れた好物の鮭を開きまして、薄山送つて來たので店で賣る品とまはるさきり異なる

久し振りの珍味に饗酌の定量を過ごし乍ら煮たり焼いたりして、自分としては稀な健啖振りを發揮したが、一兩日前の朝露所へ入ると雨風の重い空気に、これ些鮮新の時機を過ぎた鮭が紛々として居た處からゆくりなくアイヌ部落を訪れた其頃の自分をまざまざと心に描いたのであつた

はまなすの熟るる瀬邊に差らへる、メノコを追ひし憶ひ出に笑ひ、これは皆てマートモホルの本社主催短歌會で當時を追憶した拙歌である

本社主催短歌會

日時 五月二十四日(日曜)午後一時

場所 松ヶ岡公園尼子亭

會費 金二十錢

兼題 『風』 二首

兼題 『初夏雜詠』 二首

二十三日迄本社宛送附の事

(當日は本紙歌壇の小山田前、新妻現兩選者出席の筈)

新緑散策

伊藤 寒山子

春隣同人四名、去る五月九日白鳥嶺泉に遊ぶ、瀧山の新緑燃ゆるが如し

峽せまし山女魚をそたつ瀬はたぎ

松の花青潮さやく徑に散り

新翠の土の香ながれ松の花

のびやかに湧けむらうすれ松の花

煙草の火吐く夜をみだらにす

旅衣ぬぎすつる間も河鹿鳴く

病 後

あさハ咲き今朝野をゆひ呼吸かろし

河鹿笛遠のき溪流かそかなり

雷雨來て夜の遠蛙耳に消ゆ

由女魚釣る男に木立深まりぬ

瀧の石に水切る草履河鹿峽

送石井校長赴任

珠雲 小野野平

蕨育多年降徳聲

果然今日見恩榮

排除積弊獎溫雅

努力砥當答聖明

△渡邊華山嶺に下る

(天保一〇)△神社々

格を定めらる(明治

四)△鎮座を師團と改む

(同二)△火葬音相送る

(昭和七)△堀口文化使節

南米に出發(同二〇)

△渡邊華山嶺に下る

(天保一〇)△神社々

格を定めらる(明治

四)△鎮座を師團と改む

(同二)△火葬音相送る

(昭和七)△堀口文化使節

南米に出發(同二〇)

△渡邊華山嶺に下る

(天保一〇)△神社々

格を定めらる(明治

高橋是清

松浦泉三郎作

佐々木今朝吉書

この親子を!

「まあ!」

「女二人は寄り合つた

高橋是清

松浦泉三郎作

佐々木今朝吉書

この親子を!

「まあ!」

「女二人は寄り合つた

高橋是清

松浦泉三郎作

佐々木今朝吉書

この親子を!

「まあ!」

「女二人は寄り合つた

高橋是清

松浦泉三郎作

佐々木今朝吉書

この親子を!

「まあ!」

「女二人は寄り合つた

高橋是清

松浦泉三郎作

佐々木今朝吉書

この親子を!

「まあ!」

「女二人は寄り合つた

